

びゅるっ……びゅるるっ……

壁際で立ったまま、キキヨウの中に射精した。
熱い精が、まだ締め付けの強い膣内へ勢いよく注ぎ込まれる。

「……はあ。ベッドまで待てないなんて、先生もみつともない」

キキヨウはそう言いながら、息を整えている。

だが、本当に待てなかったのは、彼女の方だ。
分かったうえで、私はそれに合わせる。

「次はベッドでしょう」

「……当然でしょ。立ったまま一回目なんて、効率が悪い」

そう言いながらも、彼女の腰は私に押しつけられたまま動かない。



キキヨウは膝を折ってしゃがんだ。

おま●こから精液が糸を引き、床に落ちる。

キキヨウはそれを無視して、私のまだ半勃ちのものを手に取る。

「先生、お掃除好きでしょ。仕方ないからやってあげる」

そう言っ舌を這わせる。

掃除にしては吸い付きが深すぎる。

一度では足りない、早く立て直して三回戦に入りたい。
その意図は、しゃがんだ瞬間の目で分かった。

「……ふふ。元気、戻ってきたみたいね」

口を離さずにそう呟く。目だけが上を向いて、私を見ていた。

限界が近い。
このままだと、口の中で出してしまおう。



ベッドに移動し、後ろから挿入しなおした。

フェラの余韻が残ったまま、先端が入り口をこじ開ける。
ぬふっ、と奥まで沈んだ瞬間、射精感が喉まで突き上げた。

「……っ」
「分かってる。今、出そうなんですよ」

彼女の内側がきゅつと締まる。

射精を促すための、計算しつくされた圧力。
二秒でも早く中に出してほしい、というのが透けて見える。

それを口に出せば否定するだろうから、
私は否定されない形で応える。

びゅるっ………!!

びゅるるるっ………!!

三回目とは思えない量が、奥まで注ぎ込まれる。
その瞬間、キキョウの体が大きく震えた。明らかにイっている。
けれど彼女は、すぐに息を整えて、いつもの声に戻した。

「……先生。まだ足りないって顔してる」

遠回しに、このまま続けろと言っている。
私はキキョウの胸を強く握り、腰を再び沈め直した。







